

『犬山里語記』について

— 肥田信易とその周辺 —

日 比 野 晃

尾張藩の官撰である「尾張志」の作成に着手された一八三三（天保三）年に先んじること十五年、一八一七（文化一四）年の自序のもとに「犬山里語記」は一町人の任意の手によって生みだされた。

『犬山里語記』はその序文で述べられているように、著者である肥田信易が少年時代より出生地犬山の古老から聞いた事柄を、後の時代に参考になればと願って、書き留められたものである。



自筆本（肥田家蔵）

これは全十二巻から成り、その内容は寺社等の宗教関係、犬山城主、地理、人事、産業、商業等の歴史と現状、そして伝説等、極めて多岐にわたっている。

肥田信易は犬山の町人町の下本町で、岡田平右衛門璩の長男として生まれた²⁾。屋号は沢屋と称し、代々犬山の東部善師野で産する籠石⁴⁾の問屋を営んでいたようである。信易とは字で、本名は久吾⁵⁾であり、祖父平右衛門寧栄が休吾と号していた⁶⁾ところから命名されたのではなからうか。また、百五斎、除風とも号して印判を用いている⁷⁾。

信易は初め驚見六右衛門宣豊の娘である益と結婚し、二女（小八⁸⁾と郁⁹⁾）の父親となったが、小八十を幼少のうち¹⁰⁾に亡くし、次いで妻に先立たれた。信易は自分の戒名を麒麟浄麟居士とつけて貰い¹¹⁾、妻の戒名の左に併記した墓碑を犬山の徳授寺の塔頭龍雲庵に建立した¹²⁾。この墓碑には次の碑文が刻まれている。

妻名益。驚見氏。父宣豊。母後藤氏。享和二年壬戌三月二十九日。以病没。春秋二十六。葬于此。

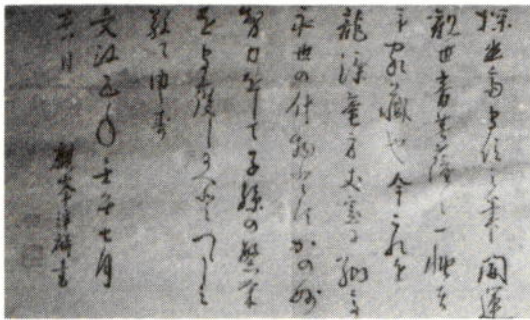
妻子との永劫の別れの悲しみとともに、信易には幼女郁の養育の必要があった。こう云う事情のもとに、信易は益の死後多くの歳月

を待たずして再婚したのであった。

再婚の相手は、中町に住していた肥田九左衛門の娘すゑである。

信易はこの再婚を養子縁組の形で行っており、こゝにおいて妻女方の梅鉢屋に籍を入籍した。梅鉢屋は麦問屋を営んでおり、一八〇三(享和三)年には、信易は取締役問屋を仰せつけられている。この年に前妻益との娘郁を幼くして失う不幸があったが、その後一、二年にして、すゑとの長男善助を授けられた。善助の誕生の後に、今一人文と云う娘に恵まれたが、文は五才を迎えず夭折する運命にあった。

一八一七(文化一四)年二月、信易は町代を長く勤めていたのでその功勞として、宗門改帳に関して一帳一札の扱いを受けることになった。



肥田信易の願文 (龍濟寺藏)

信易は肥田家の養子縁組後も、それ以前の龜石問屋を兼業しており、一八二一(文政四)年まで問屋株は保有されている。一八二二(文政五)年七月、信易は肥田家の檀那寺である大山の瑞泉寺の塔頭龍濟庵に、狩野探幽筆の雲上の馬上観音像を奉納した。これには願文が添えられており、その文面は左の通りである。

探幽斎守信之筆、開運觀世音菩薩之一帖者、子家藏也。今これを龍濟庵方丈室尔納亭、永世の什物登須。かの妙智力をして、子孫の繁栄を守護し給へ登、つゝしミ敬て申奉。

『犬山里語記』を書きあげた信易は、次いで『犬山昔物語』(小牧合戦記)を一八二七(文政一〇)年頃に著わした。その後、一八三七(天保八)年五月に妻すゑと死別した信易は、妻の跡を追うかの如くその三年後、一八四〇(天保一一)年十月五日天寿を全うした。享年はわかっていない。

三

龜石問屋のみならず麦問屋をも営んでいた信易は、当時の犬山と云う城下町において、可成り有力な町人であり、経済的に恵まれた環境にあったとみることが出来る。当時においても高価であったであろう狩野探幽の軸が所有されていたこと、またそれを檀那寺へ奉納できる余裕があったことからそれが裏附けられる。豊かな財力は書籍や書画の購入を可能にし、自由なる時間を提供したのであろう。大山にはすでに十七世紀の中葉に、津田藤兵衛房勝が地誌とも云うべき『正事記』を著わしていた。また、松濤舎琴流(『横井弥三右衛門』が一七七一年(明和八)年の自序のもとに、『犬山旧事記』(『雑話犬山旧事記』)を書いていた。そして、信易と同時代には長足庵甫磨(『渡辺新右衛門』)が、『犬山視聞図会』(『犬山名所図会』)を、一八〇四(文化一)年の序でもって筆にしていた。

こうした書物に信易は何らかの形で接する機会を持ったことであろう。読書に関して云えば、『犬山里語記』を著わす以前に、橋成季著の『古今著聞集』や尾張藩における最初の官撰地誌である『張州府志』、そして天野信景が筆にした随筆『塩尻』を読んでいる事実がある。

信易の祖父は休吾と号し、『御家譜』或いは御高札の古文言、其の外²⁰を書き写して、残している。信易の知的な性向は、こうした家庭環境の中で、幼少からはぐくまれてきたであろう。

『犬山里語記』附言に「有定に承り侍る」と云う一節があるが、この有定とは、「正六位堀大隅守輝榮²¹」であり「歳八十弍にして上京し、吉田殿にて神体勸請し御相伝相濟²²」した犬山の産社・針綱神社の前神官である。『犬山里語記』の構成をみると、卷之一には「産社并別宮撰社、附り産神祭礼式」、卷之二には「諸神社、附り神主・神人家・陰陽師」と配列しており、『犬山里語記』全巻において、神社関係の内容が占める比率は大きい。また、休庵齋宗閑と云う者を、²³「智謀に勝り気性が高くて士民の差別なく自分に気に入らない事は面前で拒否するが、若輩の者達にはよく面倒をみた人」であるとして、犬山では「前神主有定、俳士文章翁、此宗閑等の如きは前代未聞の人なるべし²⁴」と信易は論評をしている。

封建時代の士農工商と云う身分制社会において、町人として生まれた信易は、士民の別なく行動した宗閑や、藩士の身分を捨て、芭蕉の門に入った内藤文章、そして身分的には武士より上位にありながら武士のように威張ることをしない、神職にあった有定に好感をも

つたであろう。そうした有定と親交を結び、故事を聞いたり古文書を見せて貰ったものと考えられる。

信易が交流した人物に、古典学者河村秀根の子息である河村益根がいた。この益根は、後に犬山の藩校敬道館の教授になった漢学者の戸田新吾とも交際があったので、信易は、この新吾とも交流した可能性がある。

今一人、信易が親しくしたであろうと考えられる人に、渡辺新右衛門がいる。新右衛門は長足庵と号して、『犬山視聞図会』を著わしているが、この書の記事と『犬山里語記』のそれと部分的に類似しているところがあり、有定などの媒介でもあって、郷土史に関心を持っていた両者は切磋琢磨したとも思われる。

四

『古今著聞集』・『張州府志』・『塩尻』、或いは『正事記』・『犬山旧事記』・『犬山視聞図会』等を読むことによつて触発され、周辺の知識人との交流によつて刺激されて、信易は『犬山里語記』を執筆したとみることができると。

しかし、何んと云つても彼に筆をとらせた最大の動機は無常感であつたのではなからうか。愛する妻子を次々に四人も失つた信易はこの非情な運命に対して、夫としてまた父親としての悲しみを越えた境地に立たされたに相違ない。そしてひとたび眼を世間に向けると、六七代も相続したる家、今はわかれて五軒となる。其の氏を尋

ねるに、奴僕と成て家氏をしらず。紋は丸に立沢瀉をむかしより定紋とすという。かくのごとの事なり。富貴貧賤は其の世代によるものなり」と認識する。斯様にはかない現実の中にあつて、せめて文字で以つて今の現実を後世への便りとして残そうとしたのであつた。

五

「其の家の世主によりわが思うまゝに旧記をこしらえて子孫に伝える」虚偽を排斥する信易は「唯、里人の口づたえにして残し侍る事を」「正偽、是非の弁義も撰ばず」にしたためた。このことは「犬山里語記」が作為で以つて書かれていないことを物語るものである。また、一方的な解釈や取捨選択がなされずに、ありのまま、書き残されたことは、現在、歴史研究をする上で、『犬山里語記』は史料としての意義を増すものである。

史料の価値についてみると、『犬山里語記』は、いわゆる一等史料と云われる根本史料である朱印状・証文・高札の文面を写しとつており、それらの原物が殆んど失われている現在、極めて重要である。

一方、証文等の古文書では知られない生活上の詳細な記事が書き述べられており、血の通つた歴史像を描く上において大きく参与してくれるものを持っている。

そしてこれは、権力者の命によつてではなく、自由な立場で、町人の手よつてものされたものであり、当時の城下町、犬山の社会を支えていた庶民の真相を客観的に把えている点も高く評価される。

六

『犬山里語記』の原本は、信易の子孫である肥田家に保存されている十二巻のうち、巻之一以外その所在が明らかでない。

写本は、一八四六（弘化三）年から一八五五（安政二）年にかけて近藤秀胤が筆写したものが犬山市立図書館にある。秀胤は『犬山里語記』以外にも多く写本をしており、『犬山里語記』の写本にあつては主観で以つて内容を省略したり、自らの知識を書き加えている点がある。

西尾市立図書館（岩瀬文庫）にある写本は、写本の時期及び写本者名が記されていない。これは巻之一・三が欠本である。

名古屋市立鶴舞図書館にある写本は、名古屋市史編集の為の一史料として、一九一〇（明治四三）年に奥村定が写したものである。

これは、前記の近藤秀胤写本を写したもので、四分冊にまとめられている。また名古屋市立東図書館（蓬左文庫）にある写本は、一九三〇（昭和五）年に鶴舞図書館本によつて校合した、抜萃本である。

以上の外、犬山市下本町の柴田家にあるとのことであるが、まだ披見に及んでいない。

なお、一九三五（昭和一〇）年に犬山尋常高等小学校（現犬山市立犬山北小学校）の教師達の手によつて、謄写版刷りが出されたが、今はそれも散逸して、所在がわかつているのは名古屋大学附属図書館、小牧高等学校図書館そして犬山の円明寺と前田稲作氏宅である。

付記 本稿の作成には、肥田啓三・岡田六三郎・関董光・佐橋崇学・高橋良鑑・鈴木利彦・前田稲作の諸氏、大山・西尾・刈谷・名古屋の市立図書館及び徳授寺・本光寺・円明寺から、史料の提供を受けたり、協力を頂いたことを記して感謝する。

注

(1) 『大山里語記』巻之一の序は一八一七(文化一四)年となっているが、この年は「附言」に「筆取初」とあるところから、起筆の年である。巻之十一には一八二三(文政六)年の記事があり、同著者による『犬山昔物語』(『小牧合戦記』)の自序が一八二七(文政一〇)年に記されているところから、『大山里語記』は少なくともそれ以前に全巻が書きあげられていただろう。

(2) 肥田家所蔵家譜覚書

(3) 徳授寺所蔵過去帳(天保十四年、庵主雄柱再誌)

(4) 『大山里語記』巻之十一

竈石については、一八〇四(文化一)年の序がある。『犬山視聞図会』(長足庵著)にも、竈石切図の見出しで「善師野寺洞の里人は石工を業として常に山に入りて燈籠焼火鉢其の外さままものを作りて商ふなり。此の山の谷川に木の葉石生ず」と写生図の中に記されている。またその説明文には、「寺洞は駅より五六町東へ入。此の村人石を伐さままの品を仕出し馬人の肩に持たせて犬山の町へ商ふ。是土産の一といふべし」とある。

(5) 徳授寺所蔵過去帳において、海印智証大姉(『信易の妻』)を祭つ

た者として「下本町久吾」とあり、『大山里語記』巻之九及び十一に「梅鉢屋久吾」「下本町久吾」と自らを記している。

(6) 岡田平右衛門寧栄墓碑銘(徳授寺)

(7) 肥田家所蔵『大山里語記』巻之一の附言の末尾にある除風印。近藤秀胤写本『大山里語記』巻之一の附言の末尾に百五齋除風印の写し。

(8) 肥田家所蔵家譜覚書

(9) 一七九七(寛政九)年二月十一日没。戒名が遊仙童女であるところから夭折であることがわかる。(徳授寺所蔵過去帳)

(10) 信易が生前に戒名をつけて貰っていることは、一八二二(文政五)年七月に信易が瑞泉寺搭頭龍濟庵へ狩野探幽筆の観音像とともに願文を奉納しており、麒麟浄麟書と自記しているところから明白である。

(11) この墓碑は後に肥田家の檀那寺である龍濟庵へ移され、現存している。

(12) 再婚の年月は明確でないが、『大山里語記』巻之十一に、一八〇三(享和三)年五月の記事に「梅鉢屋久吾」として信易の名が表わされているところから、この年以前に再婚したと考えられる。

(13) 肥田家所蔵家譜覚書

(14) 『大山里語記』巻之十一

(15) 戒名は影良郁童女(肥田家所蔵家譜覚書)

(16) 龍濟庵過去帳(大正十一年十月、龍濟菴太元代記)に善助の享年が七十才と書き入れてあり、一八七四(明治七)年の没年から逆算すると一八〇四(文化一)年頃の出生が考えられる。

(17) 一八一〇(文化七)年五月二日没。戒名は彬幼宣童女(肥田家所蔵家譜覚書、龍濟庵過去帳)

(18) 『犬山里語記』 卷之九

(19) 『犬山里語記』 卷之十一

(20) これは現在も龍濟寺(龍濟庵は現在龍濟寺と改められている)に保存されており、この軸の裏側に信易自筆の願文が貼附されている。

(21) 妙智力とは観音様の力と云う意。

(22) 本光寺過去帳(大正十一年初春、三十七世日隨記)

肥田家の檀那寺の宗旨は臨濟宗であったが、本人(すゑ)が法華信仰で改宗していたのか、本光寺(日蓮宗)に葬られた。

墓碑は、一九六七(昭和四二)年に肥田家によって、本光寺から移されて、現在、龍濟寺にある。

(23) 龍濟庵過去帳

(24) 『犬山里語記』の序の冒頭に、「今をむかしにくらべて、しのぶのくさのしのぶざらめやと、紀のつらゆきのかきたまいしをつらくおもひて」とあるが、これは紀貫之の大井川行幸和歌序の一節「……このことの葉、世のすゑまでのこり、今をむかしにくらべて、後のけふをきかん人、あまのたくなわり返し、しのぶの草のしのばざらめや」から引用しているものである。

ところがこの紀貫之の序文は、『古今著聞集』に抄入されて、後世に伝えられてきているから、信易がこの引用をしたことは、『古今著聞集』を読んだ結果であると考えられる。

『張州府志』については、『犬山里語記』卷之一で、引用している。

『塩尻』については、『犬山里語記』卷之十二で、『塩尻』に伝う或

説に「……」と、これもまた引用しているところからわかる。

(25) 『犬山里語記』 附言

(26) 『犬山里語記』 卷之二

(27) 『犬山里語記』 卷之十二

(28) 『犬山里語記』 卷之十二

(29) 児玉幸多著『身分と家族』(「岩波講座日本歴史」10所収)

(30) 市橋鐸著『犬山こぼれ話』に、天明六年暮春の自序のある『始曠齋新旧録』に河村益根の交友のあった人々の名が記してあり、その中に戸田新吾や岡田久吾があったとある。しかし、この『始曠齋新旧録』は戦災の為に現存していないとのことである。

(31) 『犬山里語記』 附言

(32) 同右

(33) 『犬山里語記』 序

(34) 肥田信易より数えて第六代目に当る、肥田啓三氏が保存されている『犬山里語記』は全十二巻であるが、このうち巻之一の一冊は、信易自筆の願文(龍濟寺藏)と同一の筆であることが、林屋辰三郎先生によって裏付けされた。

なお、他の十一冊(巻之二〜巻之十二)は一九〇一(明治三四)年に小島由松が写本したものであり、それを啓三氏の祖父半三郎が譲り受けたものである。写本の末尾に「こたび赤堀播磨守所持の由、木野村日比野孫右衛門より借り、子孫永統の為に写すもの也」とある。

(35) 近藤秀胤の写本は、『犬山藩由緒書』、『国候御遷化御葬式次第書』、『犬山え大納言様御巡視御次第書』、『成瀬家御忌日』、『観聞随筆記』、『観聞随筆』、『犬山家中御軍用指物図解』、『濃国雑事記』等がある。

(36) 鈴木利彦氏談。鈴木氏は当時犬山尋常小学校の教師をしており、謄写版刷りの『犬山里語記』作成に従事した一人である。